

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 22 日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23330224

研究課題名(和文) 日本におけるリテラシーの歴史的形成過程と「学び」の変容に関する実証的研究

研究課題名(英文) A Historic Formation Process of the Literacy in Japan and Substantial Study on Transformation of the Learning

研究代表者

大戸 安弘(OHTO, Yasuhiro)

横浜国立大学・教育人間科学部・教授

研究者番号：90160556

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,700,000円

研究成果の概要(和文)： 近世より近代への移行期における識字と学びの変容過程を解明した。一般に前近代日本人の識字状況は世界的水準において最高度であるという認識が支配的である。しかし、そのあり方は均質的なものではなく、地域差がかなりあり、必ずしも経済的状況が投影されたものでもないことが明らかになった。また、これまで断片的に論じられてきた識字の展開過程がはじめて実証的に検討され、前近代日本の識字状況の移行過程がほぼ確認された。

研究成果の概要(英文)： It is a study sent to under the problem awareness that we elucidate a process of the transformation of the literacy and the learning in the shifts period from the early modern times to modern times. Generally, as for the literacy situation of Japanese people in pre-modern, a viewpoint to be supremeness in an international standard is dominant. However, as for the way, there was considerably a local difference not a thing with a homogeneous expanse, and it became clear that the necessarily economical situation was not a reflected thing. In addition, a development process of the literacy that has been discussed fragmentarily is considered substantially for the first time until now, and the process of the change of the literacy situation of Japan will be almost confirmed in pre-modern.

研究分野：日本教育史

キーワード：リテラシー 学び 識字 自署 テキスト

1. 研究開始当初の背景

前近代社会とりわけ近世期の日本における民衆層の識字状況は、同時代にあっては国際的に見て最高水準に達していたという捉え方が、この種の問題に関心を寄せている一般の人々においても、また研究者の間においても、ある種の定説のように受けとめられているような傾向がある。しかし、このような捉え方は真実なのだろうかという問いから、この共同研究は始まっている。

近代学校制度が西洋社会から導入される以前の日本の社会において、実際に民衆層の間にどの程度の水準で識字力が普及していたのか、また、そのような識字力は古代・中世からの近世にまで至るまでの間に、どのようにして形成されてきたものなのか、そして識字力の形成に伴うことになる学びの有り様や変容の過程はどのようなものであったのかという問いへと展開していくことになる。さらに、明治期以降の近代学校制度の導入を契機にして、識字状況と学びはどのように変容していったのか。

このような問いのいずれに対する答えも、そう容易に出てきそうなものはみあたらないのであるが、このことは、前近代日本の社会において、とりわけ近世期の社会において、識字率が際立って高く、それに伴う学びの達成度の高さについての論拠は、さほど明確であるとはいえないようである。

2. 研究の目的

この研究の主要な目的は、すぐには答えの出そうもない上述の問題について、可能な限り実証的に接近し論証してみようということである。すなわち、日本における識字状況の歴史的な展開過程について、また、それに伴う学びの変容過程について実証的な検討を加えてみようということである。とはいえ、識字状況の全国的な推移を正確にトレースするなどということは、どのように考えても不可能である。このようなことは、今日現代の識字状況についてさえ、容易とはいえないことである。

識字といわれるものの定義それ自体が、必ずしも明確とはいえず。その時々 of 社会的な要請によっても、異なることを意味してきたという経緯があるからである。ましてや、識字状況の歴史的展開過程となれば、さまざまな状況証拠のようなものを積み上げるしかないのが現状といえる。それでも、状況証拠を積み上げて行く以外に、史実を解明する方法がないこともまた明らかである。この研究の目的は、このような研究の蓄積を少しでも積み上げることにある。

3. 研究の方法

識字状況の全国的な広がりについて正確にトレースすることの難しさはすでに述べたが、実は識字に関する実証的な事例研究は、1990年代以降に出現しはじめており、断片

的ながら、最低限の識字能力の地域的な文獻状況が明らかになりつつある。結論的にいえば、それらが与える識字状況に関する示唆は、性と地域による落差があまりにも大きいものであり、容易に一般的な知見を措定することを許さないものとなっている。

これらの実証的な研究の多くは、署名能力に関する史料を用いたものである。これまで、花押・入札・署名自記に関する行政調査の三種類の史料が分析対象とされている。これらによって、自己のあるいは他人の姓名を記しえる人が、把握された集団のなかにどのような比率で存在しているかが検討されてきたのである。もちろん、署名をなすうることと、十分な識字能力を有していることとの間には、大きなギャップがあることは言うまでもない。しかし、種々の文書に署名したり花押を据えることができるということは、まったくの無筆ではないことを示していると思われる。したがってこのような人々がどのように存在していたのかということは、貴重な情報というべきであろう。

在来の研究蓄積によって示されている、近世から明治初期にかけての識字と学びに関するイメージは分裂しているといってもよい。ある史料によれば、署名のような最低限の識字能力ならばかなり広範に普及しているように思われるが、別の史料によれば、少数の人のみが、実用的な識字能力を有しているに過ぎないようにもみえる。残念ながら、以上のような分裂を解消して、一つの歴史像を結ぶことは、現在の識字史研究においてはまだそこまで至っていないというほかはないのが現状である。必要なことは、特定の史料から性急に結論を得ようとせず、さまざまな史料が語る多様な実態を、可能な限り復元していくことと思われる。

この研究では、識字と学びの諸相を、多面的に掘り起こし、それらが結ぶ像をできるかぎり立体的なものにしていくことを、強く意識している。

4. 研究成果

(1)古代から中世・近世を経て明治初年に至るまでの長い時間軸のなかで、それぞれの区切りとした時代の識字状況を把握するために見逃すことのできないと思われる重要な課題に取り組んだ。統計的概括的手法ではなく、地域性と個別性とを意識した識字に関する歴史的研究は、必ずしも十分とはいえない状況にあって、この研究での試みは限定的ではあるがその間隙を埋め、この国の識字をめぐる多くの無名の人々の営みの足跡を辿ることが可能となったといえる。もちろん、各時代で取り上げるべき課題はまだ多く残されており、今後のさらなる蓄積が待たれることは言うまでもないが、研究成果総体を通して、以下のような点を確認することができるのではないかとと思う。

(2)平安貴族において、それも様々に重要な役割を担うことになる相当高位な上級貴族であっても、国風文化を尊重する時代状況にも応じて、とても十分とはいえない識字力で宮廷における見過ぎ世過ぎをなんとかやり通せることが可能であった。その具体相の一端を捉えることができた。一方で、少なくとも中世・近世の民衆層が示していた多層的な識字力は、それぞれの時代を生き抜く上で大きな支えの一つとなり、それ故に識字力を獲得しようとする人々の意識は強くあったといえる。彼らは、制限や困難の伴う状況のなかで多様な取り組みをなし、そのことが民衆層の識字状況の多様性や豊かさとして結実していたといえる。

(3)ただし、上述のことは全体的な広がりを持つものではなく、地域間の落差が非常に大きかったということにも留意する必要がある。それも畿内やその周辺であるから豊かな識字状況が一般に現れるというような、広域的なものではないということである。ある地域ですでに濃密なリテラシーが成立していたとき、別の地域ではごく少数の人のみが文字の読み書きを行っているということは珍しくなかったであろう。またそのような状況さえ、常に変容しつつあるものでもあったといえる。

さらに、畿内と比較すると、畿内から遠隔地の民衆層の識字力は薄く乏しいものではないかという一般的な思い込みも覆された。越中五箇山という冬期には豪雪に埋もれる厳しい環境にある山間部にいきるなかで、限りなく強い信仰への希求を絶やすことのなかった人々や、奥州会津の高田町という門前町で商業活動を担った人々が示した識字力を礎石とした学びの深さも明らかになった。

このように、識字とリテラシーの状況について、一定の像を描き出すことには相当な困難が伴うことも事実である。

(4)この国の前近代社会生きた人々の識字水準は、同時代の世界水準のなかで圧倒的に高い位置にあったというような、大まかな思い込みともいうべき状態から一旦自由になり、あらためて個別具体的に、それぞれの時代の社会を支えていた人々の識字力形成や学びの深まりについて、一つ一つ明らかにすることが今後の課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 14 件)

池田雅則、明治期の班任文官層：キャリア形成としての教育史における研究対象、兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要、査読有、第 22 巻、2015、1-14

木村政伸、キリシタンと文字学習、日本教育史往来、査読無、第 208 号、2014、1-3

太田素子、田中月歩と『袖塚集』について：近世会津地方の郷学師と地域文化、和光大学現代人間学部紀要、査読無、第 6 巻、2013、115-128

八鍬友広、識字史研究の課題と展望、日本教育史研究、査読無、第 32 号、2013、126-142

八鍬友広、明治期の往来物に関する研究：書式文例集の展開、東北大学大学院教育学研究科年報、査読無、第 62 巻 1 号、2013、1-15

柏木敦、義務教育段階における二重学年制に関する研究：戦前期日本における二重学年制の導入とその反応、人文論集、査読無、第 48 巻、2013、71-91

大戸安弘、武蔵国増上寺領王禅寺村における識字状況-寛政期・文化期村方騒動を通してみた-、日本教育史学会紀要、査読有、第 3 巻、2012、5-33

川村肇、教育勅語発布後の小学校修身教育の実際(上)『修身教案 第一/二学年』、マテシス・ウニウェルサリス、査読無、第 13 巻 1 号、2012、23-60

鈴木理恵、官立長崎師範学校蔵書中の「参考書」、広島大学大学院教育学研究科紀要・第三部、査読無、教育人間科学関連領域、第 61 巻、2012、11-20

鈴木理恵、近世後期の学び：阿弥陀寺と壇ノ浦合戦、教育学研究紀要、査読有、第 58 巻 2 号、2012、333-338

鈴木理恵、官立長崎師範学校の蔵書、広島大学大学院教育学研究科紀要・第三部、教育人間科学関連領域、査読無、第 60 巻、2011、17-26

池田雅則、学制を迎えた農村の漢学師匠：新潟県長善館館主鈴木別軒を事例として、地方教育史研究、査読有、第 32 巻、2011、21-43

池田雅則、明治前期の遊学に対する漢学塾の取り組み 新潟県西蒲原郡長善館を対象として、地方史研究、査読有、第 61 巻 1 号、2011、20-39

八鍬友広、明治維新期の郷学に関する一考察-小千谷学校を事例として-、地方教育史研究、査読有、第 32 号、2011、1-19

〔学会発表〕(計 6 件)

池田雅則、近代移行期における学習歴の構造化について：日記という史料、第 33 回日本教育史研究会サマーセミナー、同志社大学、2014

大戸安弘、『濱底小児教種』『船方往来』成立をめぐる諸状況-19 世紀中葉九十九里地方の教育状況に関する若干の考察、日本教育史学会第 566 回例会、謙堂文庫 2012

鈴木理恵、「一文不通」の平安貴族、教育史学会第 55 回大会、京都大学、2011

八鍬友広、百姓自署からみた 17 世紀前半日本における識字状況の一事例、教育史学会第 55 回大会、京都大学、2011

大戸安弘、武蔵国増上寺領王禅寺村における識字状況-寛政期・文化期村方騒動を通してみた-、教育史学会第 55 回大会、京都大学、2011

太田素子、『継声館日記』にみる郷学「継声館」の教育-近世会津地方における在郷商人の学問と教育意識-、教育史学会第 55 回大会、京都大学、2011

〔図書〕(計 5 件)

大戸安弘、八鍬友広、木村政伸、鈴木理恵、太田素子、川村肇、梅村佳代 識字と学びの社会史-日本におけるリテラシーの諸相-、2014 年、思文閣出版、352 頁

王敏、大戸安弘他、「日本意識」の根底を探る-日本留学と東アジア的「知」の大循環、2014、三和書籍、436 頁

池田雅則、私塾の近代 越後・長善館と民の近代教育の原風景、2014、東京大学出版会、465 頁

神辺靖光、大間敏行他、明治期中学校形成史-府県編 東日本、2014、梓出版社、448 頁

鈴木理恵、近世近代移行期の地域文化人、2012、塙書房、537 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大戸安弘 (OHTO, Yasuhiro)
横浜国立大学・教育人間科学部・教授
研究者番号：90160556

(2) 研究分担者

八鍬友広 (YAKUWA, Tomohiro)

東北大学・教育学研究科・教授
研究者番号：80212273

木村政伸 (KIMURA, Masanobu)
新潟大学・人文社会・教育科学系・教授
研究者番号：70195379

川村 肇 (KAWAMURA, Hajime)
獨協大学・国際言語文化学部・教授
研究者番号：60240892

太田素子 (OHTA, Motoko)
和光大学・現代人間学部・教授
研究者番号：80299867

鈴木理恵 (SUZUKI, Rie)
広島大学・教育学研究科・教授
研究者番号：80216465

天野晴子 (AMANO, Haruko)
日本女子大学・家政学部・教授
研究者番号：50299905

柏木敦 (KASIWAGI, Atsushi)
大阪市立大学・文学研究科・教授
研究者番号：00297756

軽部勝一郎 (KARUB, Katsuichiro)
熊本学園大学・経済学部・准教授
研究者番号：30441893

池田雅則 (IKEDA, Masanori)
兵庫県立大学・看護学部・准教授
研究者番号：6060973

(3) 研究協力者

大間敏行 (DAIMA, Toshiyuki)